1 「スカウト」

福岡市――福岡県の県庁所在地であるこの街の片隅で、馬場善治は細々と探偵事務所を営んでいる。彼はこの事務所の唯一の従業員であり、好きな食べ物は豚骨ラーメンと明太子、夏になると博多の祭りに命を懸け、福岡に本拠地を置くプロ野球球団を熱狂的に応援しているという、地元愛の塊のような生粋の博多っ子だ。

事務所兼自宅のこの部屋で、馬場はプロ野球中継を観戦していた。それが彼の日課だ。馬場自身も昔から野球を嗜んでおり、今も市内の草野球チーム『博多豚骨ラーメンズ』に所属している。ポジションは内野で、主にセカンドだ。

つい最近、『博多豚骨ラーメンズ』には新メンバーのピッチャー・斉藤が加入し、これでレギュラーは総勢八人となった。だが、野球は基本的に九人でやるスポーツだ。まだ内野のポジションがひとつ埋まっていない。残念ながら人員不足は続いており、現在絶賛ショート募集中である。

「――馬場、邪魔するぞー」

豚骨味のカップラーメンを啜りながらテレビを眺めていると、めったに人が来ない馬場探偵事務所に珍しく来客があった。ドアが開き、四十手前の男が顔を出す。くたびれたスーツに身を包んだこの男は、重松という名前で、馬場とは長い付き合いだ。

「あ、重松さん、どうしたと？」
「たまたま仕事で近くを通りかかったんでな。顔を見に来た」
重松の職業は刑事だ。この辺りで聞き込みでもしていたのだろうか。
「サボりに来たっちゃなかろうね？」
からかうような口調で尋ねると、重松は「まあ、そうとも言える」と苦笑していた。
馬場の隣に腰を下ろしながら、
「しばらく来ない間に変わったなぁ、この部屋」
と、辺りをきょろきょろと見渡し、重松が言った。
「そう？」
「ああ、きれいになった。どういう風の吹き回しだ？」
今までこの自宅スペースには、あちこちに汚れた洗濯物が転がり、テーブルの上はカップラーメンやらコンビニ弁当やらの容器が散らかり、流し台には洗い物も溜まっていた。
ところが、今ではすっかり片付いている。
「片付けろって、居候がうるさいっちゃん」馬場はわざとらしく口を尖らせ、部屋の隅に視線を向けた。そこには、女の格好をした青年が、床に胡坐（あぐら）をかいて座っている。
彼の名前は、林憲明（リンシェンミン）。中国の貧村出身の殺し屋で、華九会という多国籍マフィアに雇われていたが、いろいろあって今はフリーランスに落ち着いている。行く当てがなく、この事務所に居候しているのだが。

「……あいつ、まだいたのか」と、重松も驚いていた。
林は我が物顔で部屋の中に居座り、両手にマニキュアを塗っているところだった。女装が趣味らしく、いつも女物の服を着ている。
「リンちゃん、それ臭いっちゃけど」馬場は顔をしかめた。シンナーの臭いが辺りに充満している。
「部屋の中で爪塗るの、やめてくれん?」
林は指先に視線を向けたまま、「うるせえ、知るかよ」と吐き捨てた。
「いやいや、ここ俺の部屋やし」
「お前が野球道具に塗ってるオイルの方が臭えだろ」
駄目だ、話にならない。林という男はまるで野良猫のようで、こちらの言うことを素直に聞いてはくれず、すぐに牙を剥いてくる。おまけに綺麗好きで、少しでも部屋を散らかすとガミガミうるさい。これではどちらが家主かわからないな、と馬場は肩をすくめた。
小競り合う馬場たちを余所(よそ)に、
「おっ、投手戦になりそうだな」
と、テレビに視線を移した重松が楽しげに声をあげた。画面の中の野球の試合は、現在1回裏、ツーアウト。スコアは0対0だ。どちらのチームの投手も調子がよく、簡単には点が入りそうにない雰囲気だった。
「最近調子いいよなぁ、このピッチャー。チームも13連勝中だろ?」
「そう」馬場は誇らしげに答えた。「勝率7割」

「敵なしだな」
今シーズン、福岡の地元球団は開幕当初から圧倒的な強さを見せ、リーグの首位を独走中だった。3番、4番、5番を打つクリーンナップ陣も調子がよく、三者の平均打率は3割5分を超えている。さらに、今日投げているピッチャーは、六月に入って負けなしの美奈川忠雄投手。三十五歳のベテランで、安定感は抜群だ。
今日の試合でも、のらりくらりと相手バッターを抑えてくれるのでは、と期待していたのだが――
「あー、甘かったな、今の球」と、重松が声をあげた。
テレビの中では、マウンド上の美奈川投手ががっくりと項垂れている。2回の表にソロホームランを打たれてしまったようだ。打者がダイヤモンドを一周し、ホームに還ってくる。相手に1点が入り、勝ち越されてしまった。
だが、それだけでは終わらなかった。
「あらら……」
ツーアウト、ランナーなし。それまでテンポよく抑えていた美奈川投手のピッチングが、突如、狂いはじめた。立て続けにヒットを打たれると、フォアボールで満塁に。さらには、次の打者にはデッドボールで、相手チームに押し出しの1点が入った。
「おいおい、ストライク入らねえぞ」と、重松が顔をしかめている。「キャッチャー、大変だろうなぁ」
とどめには、次のバッターに長打を打たれ、3点追加。次の打者は三振だったが、美奈川投手は

2回5失点という不甲斐ないピッチングで降板させられていた。
「今日、えらい調子悪かったね」馬場は首を捻った。「なんでかいな」
腑に落ちない。初回に投げている球は悪くなかった。次のイニングになった途端、彼が突然調子を崩してしまったのは、いったいなぜなのだろうか。
そのとき、隣で重松の携帯電話が鳴った。画面をのぞき込み、ちっ、と重松が小さく舌打ちする。
「呼び出しだ。行ってくる」
仕事へ向かう重松を、馬場はドアまで見送った。その後、事務所の私用スペースに戻ってみると、
「――あっ！　ちょっと！」
テレビの前には、林が座っていた。しかも、恋愛ドラマを観ている。勝手にチャンネルが替えられていた。
「野球観よったっちゃけど！」
「ドラマ始まった」
「そんなん知らんし」
「毎週観てんだよ、これ」
「野球だって毎日観よるし」馬場はリモコンを手に取り、野球中継にチャンネルを替えた。
「あっ！　なにしやがんだ！」すかさず林がリモコンを奪い返し、テレビを無理やりドラマに戻す。
「もう！　なんすっとよ！」
「うるせえ！」

「うるさいのはそっちやし！」
事務所の中に二人分の怒声が響き渡る。リモコンの奪い合いは、その後もしばらくの間続いた。

林は自分の生活空間が散らかっていることが許せない質のようで、ぐちぐちと文句を言いながらも部屋の片付けや洗濯は率先してやってくれる。だが、それ以外はまったくといっていいほど、共同生活に対して非協力的だった。

夜にふらりと出先から帰ってきては、深夜だろうが早朝だろうがお構いなしに「おい、開けろ！」とドアを蹴り続け、眠っているところを叩き起こされる日が続き、馬場は急きょ合鍵を作りに走った。ネットで買ったらしき服やらバッグやらが代引きで届けられ、代金を立て替えさせられたこともあった。おまけに、留守番を頼めば、居留守を使って来客を無視してしまうのだ。バッティングセンターから帰宅して、「さっき誰か来てたぜ。誰かはわかんねえけど」と言われたときは、さすがに馬場もちょっと怒った。「誰か来たときは、ちゃんと出てよ」と。

馬場探偵事務所のドアがノックされることは、知り合いや宅配業者、飛び込みの営業を除けば、一週間に一度あるかないかぐらいの頻度だ。金に困っているわけではないが、せっかく来てくれた客を逃すわけにはいかない。

この日、ちょうど馬場が昼飯を食べようとしていると、ノックの音が聞こえてきた。

「はーい、どうぞー」鍵は開いている。馬場はドアに向かって声をかけた。
どうせまた重松が足を休めにでも来たのだろうと思ったが、入ってきたのは見知らぬ男だった。黒い帽子を深くかぶっている。背が高く、がたいがいい。
「あ――」
見知らぬ男だと思っていたが、違った。
男の顔をまじまじと見つめ、馬場ははっとした。知っている顔だ。よく見かける。それも、テレビの中で。
「……あの、失礼ですが」馬場は恐る恐る尋ねた。「プロ野球選手の、美奈川さんじゃないですか？」
男は帽子を取り、頷（うなず）いた。「ええ、そうです」
間違いない。地元球団に所属しているベテラン投手・美奈川忠雄だ。
「うわーっ！」
思わず叫んでしまった。
「あ、俺、その、野球、大好きで」しどろもどろになりながら、馬場は右手を差し出した。「握手してくれますか」
「あ、はい。構いませんよ」美奈川は快く手を握り返してくれた。その掌は大きく、硬かった。さすがはプロのピッチャーだ。
「ささ、どうぞどうぞ、お座りください」来客を応接用の椅子に座らせると、馬場は壁の反対側に

いる居候に向かって、声を張りあげた。「リンちゃん！　リンちゃーん！」
林は今、私用のスペースでソファに寝そべり、雑誌を読んでいるところだ。不愛想な声が返ってくる。「あ？　なんだよ、うっせえなぁ」
「美奈川投手にお茶をお出しして！」
「はあ？　バッカじゃねえの。なんで俺がそんなことしないといけねえんだよ。つーか、お前が俺に茶ぁ出せよ。喉渇いたんだけど」
まるで思春期の子どもだ。扱いが難しい。すぐ口答えする。憎たらしい。
美奈川に向かって、馬場は苦笑いを浮かべた。「すみませんねえ、しつけのなっとらん子で」
仕方なく自分で麦茶を用意し、「どうぞ」と美奈川の前に差し出した。
「馬場善治と申します」今度は名刺を差し出す。馬場はさっそく本題に入った。「それで、野球選手の方が、どうしてまた、うちみたいな事務所に？」
「実は、相談したいことがありまして……」
美奈川はここへ来たときからずっと浮かない顔をしている。余程の悩みがあるようだ。
「秘密は守ります。ご安心ください」
馬場が笑顔で促すと、
「僕には、小学生の娘がいるんですが」と、美奈川は重い口を開いた。「先週、その娘が、誘拐されてしまったんです」
「えっ」予想外の言葉に、馬場は目を見開いた。「誘拐？」

続きは Blu-ray & DVD「博多豚骨ラーメンズ 1 ＜初回仕様版＞」
特典小説にてご覧ください。